

麗澤に学んで



令和6年度

麗澤高等学校

麗澤高校の道徳教育

麗澤高等学校では、毎朝のショートホームルームにおいて、教室に掲げた『心のカレンダー』（本校の教育理念の根幹である「モラロジー」の内容を、カレンダー形式に31の格言にまとめたもの（公益財団法人モラロジー道徳教育財団刊））を生徒が読み上げることから一日がスタートし、週に1時間全クラスで道徳の授業を行っています。この授業は本校の人間教育の大きな柱をなし、クラス担任が中心となって進めています。授業は、テキストである『最高道徳の格言』（本校の創立者である法学博士廣池千九郎がまとめた格言集。公益財団法人モラロジー道徳教育財団刊）に掲載されている格言についての生徒による研究発表から始まります。これに続いて、「モラロジー」を土台として「感謝の心、思いやりの心、自立の心」を育むことを念頭に、本校の教員がそれぞれの知識や経験に基づいて授業を展開します。

一方で、男子寮・女子寮では学園創立以来、道徳を実践する場としてのモラロジー教育・麗澤教育が脈々と受け継がれています。朝礼・夕礼、規律正しい集団生活を通して、父母・祖先・および恩人に感謝する心、相手を敬い思いやる心、率先垂範の心がけなど、様々なことを学んでいます。

ここでは、令和6年度卒業証書授与式における卒業生代表答辞、最上級生による「高校生活をふりかえって」、寮生による「寮生活で学んだこと」、研修旅行の感想文などを紹介させていただきます。

澄んだ空気の中で春を待っていた蕾も膨らみ始め、本格的な芽吹きの日を迎えようとしています。本日はご来賓の皆様、保護者の皆様のご臨席のもと、このような盛大な式典を挙行していただきましたことに、卒業生一同、心より感謝申し上げます。

思えば、満開の桜の中、憧れの紺色スカートを身に纏って、期待と不安とともに入学した日から早三年。段々と制服が馴染んでくるにつれて時の経過を感じるのも早くなり、最高学年になってからは「最後の」と名前が付く行事を全力で駆け抜けたかと思えば、もう卒業の日を迎えます。部活に勉強、趣味、課外活動や寮生活など、打ち込んだものは違えども、それぞれがこの三年間での経験を自分のものとし、三年前と今では見える景色はきっと違っているはずです。

正直に言うと、私は自分のことが好きではありませんでした。人とのコミュニケーションに臆病な自分が情けなく、人付き合いの上手な人と自分を比べては落ち込むことも少なくありませんでした。しかし、自分を変えたいと思って決断した寮生活の中で人と関わる温かさを感じたことで、人との関わりを楽しめるようになり、人に愛を返せる人になりたいと思えるようになりました。友人と本気で向き合う経験から、自分の心をさらけ出すことを恐れなくなり、どんな自分も受け入れてくれる、一生の友人もできました。私という人間の根本を無理に変えるのではなく、ありのままの自分を人に認めてもらうことで、控えめな自分の性格も受け入れることができ、私の中で自分という存在の立ち位置が変化した三年間でもありました。

人類が持っている宝の一つに言葉というものがあります。言葉があるから人との関わりが生まれます。言葉があるから温かい気持ちになり、言葉に含まれた愛に気づくからこそ、その人に愛を返したいと思うのです。受け取った言葉を体の中で循環させて、栄養にして大きく強くたくましくなっていくのです。ときには素直に受け入れられない言葉やトゲの付いた言葉を投げかけられることもあったでしょう。それでも、その言葉に寄り添って自分なりに噛み砕いて、自分自身に取り込み、未来への糧にしてきたのです。

私は、この麗澤で言葉の力を実感しました。麗澤では、抱えきれないほど多くの言葉のやりとりがあります。試合が怖かったときにもらった顧問の先生からのアドバイス、体調を崩した祖父に会うため、急ぎ大阪へ行く朝にもらったカイロに書かれた「絶対大丈夫」の文字、寮に届く両親からの手書きの「いつでも帰ってきていいからね」、いつもは褒めない担任の先生の「よくできました」という赤ペンの文字、ダブルスのペアと声を合わせた「はいっ」「ガンバ」。そのすべてで今ここに立っている私はできています。

麗澤で受け取ったたくさんの言葉とそれに込められた愛という栄養で、今の私達はできています。言葉と同じように、私たちの心と体を作っているのは日々の食生活です。私は、どんな子にも寄り添うことのできる、小学校の栄養教諭になりたいと思っています。幼い頃からアレルギーがあった私は母や小学校の栄養士さんのおかげで、制限のある中でも食事を楽しんできました。多くの子どもが幼い頃から食と触れる機会を持ち、一生を通して自分を作る食を楽しんでほしい、私にはそんな夢があります。

今日この場には227名の227通りの夢が溢れています。それぞれが強い意志を持って、その夢のために困難に立ち向かってきました。その過程の中ではゴールが遠く見え、伸ばしかけた手を背中に隠したくなる時もあったことでしょう。しかし、その度に私たちは立ち止まり、自分と対話し、そしてまた前を向いてきたのです。そんな227名の決意と努力を誇りに思っています。私達はこの春からそれぞれの場所であるべき自分へ向かって歩み続けます。

そんな私達に、ときには親身によりそい、ときにはそっと遠くから見守り、支えてくださった先生方。先の見えない暗闇に直面したとき、いくつも道はあることを示し、それらの入口をほんの少し照らし、その先は私達の選択を尊重してくださったことで私達の未来は自分

の限界以上に広がりました。学問の範囲を超え、人生の先輩として尊敬する多くの先生方と出会えたことを心から幸せに思います。本当に、ありがとうございました。

在校生の皆さん、先ほどは心温まる送辞をありがとうございました。これから皆さんが歩いていく道は決して平坦では無いと思います。それでも、皆さんには生徒を第一に考え、並走してくださる先生方がいます。お互いを応援しあい、辛いときには抱きしめてくれる友人がいます。そして、皆さんのことを一番に考えて支えてくださる保護者の方がいます。麗澤にはたくさんの愛が溢れています。耳をすませば多くの声援が聞こえますし、机や本棚には過去の先輩たちの努力の跡が残っているはずです。皆さんは自分が思っている以上に多くの人に支えられています。だから、安心してひた走ってください。皆さんの活躍を心から願っています。

そして、お腹の中に命が芽吹いたときから今日まで愛を持って育ててくれたお父さん、お母さん、本当にありがとう。たとえ離れて暮らしていても、私のことをなんでもわかってくれて、私の弱音を受け止めて背中を押してくれる二人の存在の大きさを、寮に入ってから改めて実感しました。心配もたくさんかけたと思います。それでも私を信じ、無条件にずっと応援し続けてくれる、そんな両親の元に生まれて、私は幸せです。

保護者の皆様、無限の愛を私達に注ぎ、今まで支えてくださったこと、心から感謝しています。私達はまだまだ未熟ですが、これからも私達の一番の応援団長であり、目標でいてください。

最後になりますが、本日ご臨席いただきましたすべての皆様への心からの感謝を込め、麗澤高校の益々の発展と皆様方のご健勝を心から祈念申し上げ、卒業生 227 名の答辞とさせていただきます。

畑毛研修旅行に参加して

4 年生 坂井 佳歩

私は畑毛研修に行って、廣池千九郎博士の考え方について少し理解が深まりました。まずはじめに廣池千九郎畑毛記念館で、千九郎博士の人生について講話をしていただきました。千九郎博士は研究のし過ぎで体調を崩されそれが悪化したことで病気になったが、それでも研究をし続けていたということを知ると驚きました。多くの方が親に「勉強なさい。」と言われた経験があると思うのですが、逆に千九郎博士は周りから止められるほどずっと研究し続けていたのが、この研修のお話で一番衝撃を受けたことでした。次に千九郎博士が畑毛富岳荘で過ごされたときのことについての講話をしていただきました。千九郎博士は研究のし過ぎで体調を崩され、それが悪化したことで病気になってしまいました。ですが昔はそれを治す特効薬はないため、温泉療法で病気を治す以外に方法がなかったそうです。そこで訪れたのがその畑毛記念館で、横になりながら毎日ずっと論文を執筆し続けたそうです。私はゲームなどでさえそんなに一生懸命にやったことがないのに、なにかに夢中になってどんなことがあっても論文を書き続ける千九郎博士は、尊敬できるとてもすごい方だと思いました。最後に千九郎博士が 2 年間にわたって『道徳科学の論文』の執筆をされた富岳荘という部屋を見に行きました。参考資料①によると、「千九郎博士は財政がゆたかでなかったため、人のふところをあてにせず、長年ご苦労して蓄積されたご自身の財力で研究しようとお考えで、すべてを最小限に切りつめて節約してゆこうとなされたからです。」現在は当時よりもきれいに整備されていましたが、千九郎博士が執筆されていた頃は畳も古く汚かったという写真を見ました。そこでずっと論文を書き続けることは誰にでもできることではないので、そのような姿勢を見習ってこれからの自分の人生に活かして行きたいです。また、千九郎博士のようにではなくても誰かに頼られたり、憧れられたりされるような人になりたいと思いました。

私は研修旅行で二日目の天岩戸神社に行って神主さんがお話ししてくださった内容が特に印象に残りました。天岩戸神社とは宮崎県の高千穂にある神社で、日本神話に書かれている天照大御神様がお隠れになった天岩戸と呼ばれる洞窟を御神体としてお祀りして天岩戸神話の舞台になった場所です。ここは神社の中でも特別な場所で御神体がある場所は神域になっていて写真をとってはいけなかったり、河上にある八百萬の神々がお集まりになってご相談をされていた天安河原は他の場所より少し涼しく小石が積み上げられていたりしました。そこで神主さんがお話になった内容は「人は死んだら神様になります。」というものでした。

その話を帰ってきて思い出したときに私は三日目に行った知覧に繋がりました。知覧特攻平和会館とは鹿児島県の南九州にある建物で戦争の悲惨さ、命の尊さ、平和の大切さを伝えることを目的として陸軍特攻作戦で亡くなられた特攻隊員の写真や手紙を展示している場所です。「人は死んだら神様になる」この言葉は特攻作戦で亡くなられた特攻隊員によく当てはまるのではないかなと思います。特攻隊員の中には本当は愛する人と共に生き行きたいという人や自分の夢にむかってまだ頑張りたかった人もいたかもしれません。でもその願望よりも特攻隊を選んで知覧特攻基地にやってきたのです。日本の戦争を終わらせたい、戦争によって亡くなる命をなくしたい、大切な人を守りたい。理由は人それぞれだと思います。でもみんな未来のために戦いました。その人達が軍神と呼ばれていた意味がなんとなくわかったような気がします。そんな人達を責めることは私には絶対にできません、でもだからといってこのようなことが二度と起こってはいけないとも思います。特攻隊の人たちが未来のためにと繋げてくれた思いを無駄にすることがないように、平和な時代に生まれることができたことに感謝して私達がこの時代の平和を守っていくべきだと思います。

知覧特攻平和会館を訪れ、私は特攻隊員たちの思いや心情に深く触れた。この施設には、彼らの遺書や辞世の歌、遺品が数多く展示されており、戦争の悲劇と平和の重要性について考えさせられる貴重な体験となった。

展示されている遺品には、戦闘機の部品や手紙、そして個人の持ち物などがあつた。それらは彼らの生きた証であり、戦争の現実を物語っている。特攻隊員たちが使っていた道具や、日常の一部を感じさせる遺品の数々は、彼らがただの軍人ではなく、一人の若者であつたことを示していた。

特攻隊員たちが書いた辞世の歌は、彼らの心情を如実に表していた。印象的な遺詠に、「大君の為何か惜まん若桜散ってかひある命なりせば」というものがあつた。この歌は、彼らが国を守るために自らの命を捧げる覚悟を持っていたことを示している。若者たちが国のために自らの命を捧げる姿は、凄まじい愛国心の表れであり感動的であるが、その裏には、本当はもっと生きたかったという思いがあつたのではないかなと思う。この愛国心と、生きたいという切実な気持ちとの間で、計り知れない苦悩や葛藤があつたということも、強く思い知らされた。彼らが、私たちと近い年齢で命を落とさざるを得なかつたことを思うと、胸が締め付けられる思いがした。

遺書もまた、彼らの思いを知る重要な資料である。多くの遺書には、特攻隊員としての使命感に溢れた言葉や愛する家族に対するこれまでの感謝、父母への親不孝を詫びる言葉が綴られていた。

特に印象的だつたのは、穴澤利夫大尉の恋人に宛てた遺書である。彼の遺書には次のような一節がある。「あなたの幸せを希ふ以外に何物もない。徒に過去の小義に拘る勿れ。あなた

は過去に生きるのではない。勇気を持って、過去を忘れ、将来に新活面を見出すこと。あなたは、今後の一時一時の現実の中に生きるのだ。穴澤は現実の世界には、もう存在しない。」「智恵子、会ひ度い、話し度い、無性に。今後は明るく朗らかに。自分も負けずに、朗らかに笑って征く。」これらの文章からは、彼の深い愛情と同時に、戦争に向かう彼自身の心情が読み取れる。彼が恋人の幸せを第一に考え、彼女が過去に囚われずに未来を見据えて生きることを願っているということが伝わる。「智恵子、会ひ度い、話し度い、無性に。」という言葉には、彼の愛する人と共に過ごしたいという強い願いが表れている。この遺書は、特攻隊員としての重い使命感と同時に、婚約者であった男性としての純粋な愛情が交差したものだと感じた。自分のいない未来で、愛する人の幸せを願う姿のあまりの崇高さ、悲しさに私は涙を禁じ得なかった。

知覧特攻平和会館での学びは、単なる歴史の理解にとどまらず、私自身の生き方にも影響を与えるものだった。特攻隊員たちの思いを受け継ぎ、戦争の悲劇を繰り返さないためには、私たちが何を学び、どのように行動すべきかを常に考える必要がある。平和の実現に向けて、私たち一人ひとりができることを考え、力を尽くすことこそが、彼らの思いを尊重することにつながる。そして未来の世代にその教訓を伝えていくことが私たちの使命であると強く感じた。

寮生活で得た宝もの

6年生 大内 才子

麗寮で得た宝物。何を書こうか、卒寮が近づくにつれ考えることも多くなり、何度も何度も頭をひねらせたが、私が出した答えは“全部”だ。上級生も下級生も、大好きな同級生も、先生方も、帰省パーティーも、大そうじも、ただの談話も、誕生会も、ケンカしたことも、悩んだことも、怒られたことも、悲しかったことも、辛かったことも、それを通して成長できた自分も、どれもこれも私の大切な思い出で、宝物だ。こんなに様々なことがあった濃すぎる3年間の麗寮での生活の中から、どれかひとつだけを選ぶことなんてできなかった。しかし、私は、どんなに些細なことも、思い出したくないような苦い思い出も、全部私を成長させてくれ、これからの私を支えてくれる宝物だと思うことができている今の自分の意識こそ、この3年間で得ることのできた最も大切な宝物だと思う。

私は幼い頃から、良く言えば負けず嫌い、悪く言えば自分の誤りを、誰かの凄さを素直に認めることのできない性格だった。さらに、自分の恵まれている点には気がつかず、感謝もできず、自分に無い何かを羨んでばかりだった。

しかし、自分の非や弱さを素直に認めることが、自分を大きく成長させる第一歩になるということ、また、より良い人間関係を築かせてくれることに、24時間を仲間と過ごす寮生活を通して気がつくことができた。最初の1学期は特に、この性格を自覚できず、人間関係で悩むことも多かった。しかし、あのお部屋だったからこそ、私は自分の改善すべき点に気が付き、さらにこうなりたい！という目標を見つけることができた。「関わる全ての人を師だと思いなさい」寮に入る前に、母からもらった手紙に書いてあった言葉だ。もらった当初は上手く理解しきれなかったが、今ではわかる。上級生、下級生関係なく、全ての人、良いところを素直に認め、自分も近づけるように努力したいと思えている今の自分が好きだ。この気持ちは間違いなく、寮生活を通して持ったものであり、この先も、私を大きく成長させる助けとなってくれるだろう。

そして今、自分が置かれている現状は決して当たり前ではなく、たくさんの人々が当たり前を作ってくれているのだと気がつくことができた。きれいに掃除される部屋も、いつのまにか戻ってくる洗濯物も、おいしいご飯が出てくることも、帰る家があることも、当たり前ではなく、心の底から感謝できるようになった。もちろん、両親と一緒に住んでいたころも

ありがたいと思っていた。しかし、寮生活を通して、実際に自分でやらざるを得ない状況になったからこそ、本当の意味で“支えられている”ということに気がつきたと思う。

『麗澤瑞浪に学んで』の確認入寮前の私の性格のままであつたら、苦い思い出まで、全てを宝だと思うことなど到底できていなかったと思う。“どんなことも全て大切な宝物”そう心から思っている自分の意識こそ、寮生活を通して得ることができた宝物だ。

麗澤での3年間を寮で過ごせて幸せでした。たくさんお世話になりました。ありがとうございました。

私の寮生活

5年生 由利 月乃

「なんで寮に入ったの？」よく聞かれるが、ぱっとした答えはいつも出てこない。実際私が寮に入ろうと決めたのは中3の11月で、それまで行きたい学校もなく進路も決まっていなかった。通っていた塾の先生に勧められて10月の学校説明会に行き、そのときにたまたま母が見つけた寮見学が、私の高校生活に対する考えを変えた。寮に入ることへのきっかけをくれたのは、寮見学で案内をしてくださった上級生だ。その方の説明してくださるときの言葉遣いや態度に衝撃を受けたとともに、すばらしいなと思った。私は、この人たちと一緒に生活してみたい、ここで高校生活を送りたいと思うようになった。

そこから、私の進路がすぐに寮生活と決まったわけではなく、最初は親に認めてもらえなかった。寮を見学していなくて寮がどのような所か、そもそも麗澤がどんな学校かも知らずにいた父には、元々の志望校の公立高校を受験した方がいいと言われていた。ともに公立高校出身の両親は、私が私立の雰囲気呑まれてしまって楽しめないのではないか、価値観が周りとは合わないのではないかなどいろいろな考えをくれていた。しかし、1回の寮見学で気持ちガラッと変わり、麗澤に行って寮生活をするという選択肢しかなかった私は、そのままこの学校に進学することを決めた。いきなり全く違う方向の決断をした私を認めてくれた両親には、感謝の気持ちでいっぱい。いつも私のやりたいことをやらせてくれてありがとう。

入寮日、どっと不安が溢れてきた。最初の1週間は、学校のことより家族のことより友達のことより、寮生活に慣れることに必死だった。でも、同学年の寮生とは、信じられないくらい早く仲良くなれた。全てに慣れていくことをしていたら、一瞬で1学期が終わった。順調に高校生活が進むと思ったが、何にもうまくいかない時期が訪れた。テストと大会が重なったり、他にも悩み事が増えたり、全部頑張ろうとしても全部が中途半端になってしまった。同じ状況の友達はうまく部活と勉強を両立させているのにできない自分に焦り、何をやるべきなのかわからなくなった。毎日疲れが取れなくて、余裕がなくて、授業も学習時間も大半寝てしまって、思うようにやりたいことができなかった。でも、そのときの部屋中さん(同じ部屋の5年生)がたくさん話を聞いてくれ、気にかけてくださり、自分の気持ちが軽くなるのを感じた。

寮は、上級生の影響も、同級生の影響も受ける。私が一番他人から良い影響を受けられるのは、テスト期間中の学習室だ。学習室に行けば、みんなが夜遅くまで勉強していて、励まし合って、眠くなったら起こし合っけこう思い出がある。隣を見たら、上級生も夜遅くまで勉強していて、自分の気持ちが高められた。勉強以外でも、一緒に生活するなかで、寮生一人一人と関わることができるから、それぞれの価値観や考え方があるということを感じられて、物事を考える視野が広がった。人と自分とは違うことがたくさんあって、ときには尊敬できると思うこともある。私が普段からよく感じるのは、私の学年には物事を率先してやる人が多いということだ。誰かしらが気づいていて、気づいたときには誰かが動いていて、声を掛け合っていて、しかもそれが一定の人だけでなくみんながみんなそういう人になれているというのが私の仲間の自慢だ。誰かがやってくれる、と思っている人がいなくて、

みんな自分で動こうとしているところがすごいと思う。いつもうるさくてふざけてばかりな5年生だけど、寮のことや相談、話し合いになると、真剣にそれぞれの考えでそれぞれが答えてくれる5年生で、みんなのことを頼りにできると私は思うし、信頼している。本当に大好きです。

3学年で一緒に過ごすということは当然、私達にも下級生ができるということ。今年の4月、部屋っ子(同じ部屋の4年生)をもって、正直とても大変だった。教えることが難しい、伝わっているかがわからない、悩みに悩んだ。ただそれ以上に、自分たちの学年での意見が合わなかったり、情報交換が足りなかったり、困惑の日々だった。一年前をみんなで思い出しながら、どんな風にいつ何を教えるのか、毎日話して考えた。私達の学年は、4年生の三学期、部屋っ子を迎える前からあまりまとまっていなかった感じがし、私は少し不安が残っていた。だからこそ、部屋っ子を迎えて、自分たちが手本になるという意識が強く芽生えた。うまくいかないことが多かった。そんなときに思い返す、私のファースト中さん(同じ部屋の最初の部屋中)が私にとって完璧な存在で、改めてすごいと尊敬したし、今だからこそ生まれる感謝の気持ちもあります。私のファースト中さんになってくれて、本当にありがとうございます。そして、私をファースト中にしてくれた部屋っ子にもありがとう。同級生の存在、部屋っ子の存在が私を大きく成長させてくれたと感じる。

二学年体制になって、本格的に自分たちが寮を作り上げていく上で、さらに仲間との関係が大切になる。これからも、自分もそして周りのみんなも、成長していける寮生活を送っていきたいと思う。

そして、送迎してくれたり、息抜きをさせてくれたりする両親に支えてもらっている分、高校生活を頑張りたいと思う。

格言「自ら運命の責めを負うて感謝す」

6年生 森田 玲央

私が選んだこの格言はどのような困難に直面しても、人生を主体的、積極的に生きていくための心の姿勢を述べたものです。私たちは人生を送るうえで様々な問題に遭遇します。その問題には無意識のうちに招いたものもあり、直接自分の責任でないものもあります。いずれにしても私たちは時間をさかのぼって人生をやり直すことはできません。そのため自分自身がその問題を主体的に受け止め改善に努力しなければいけません。

この格言は今の私と重なる点が多いと感じ、もう一度自分自身を見つめ直すためにも今回この格言を選び発表しようと思いました。

先月行われたサニックスワールドラグビーユースの予選会にて私は腰椎を捻挫し、その結果自分の力で起き上がることも、歩くことも誰かの支えを借りなければ行けない状態になりました。今まで当たり前できていたことがなにもできなくなったことから私自身、これからどうしていけばいいのだろうと毎日、毎日、言葉にできない痛みと不安と戦いながら過ごしていました。

病院の先生からは「もう少し当たりどころが悪かったら今歩けていなかったかもしれない。少なくともあなたはもうフルスピードでは走れない。」と言われたその瞬間、私はなにもかもやる気が起きなくなりました。今まで経験したことのない痛みが毎日自分を襲うためそのせいででしょうか、私がなによりも大好きだった食事の時間、唯一体が休まる夜寝る時間も大嫌いになりました。それと同時に小学生の頃から今まで好きでやっていたラグビーに対しても恐怖が生まれました。その他にもこんなことを言われました。「この怪我は外からもらった怪我だけではない。精神的に追い込まれていた中で外からの衝撃が加わっているからこれほどの怪我につながったんだよ」「最近だけのものじゃない。2ヶ月、3ヶ月前から積み重なっているものだよ」と。私はメンタルが強くない上に人に自分の弱いところを見せることができ

ないため、周りからの期待やプレッシャーに応えようとするあまり、自分自身の体の痛みや不調をごまかしてきました。そのバチがあたったのだと思いました。

私は寮生活をしているため毎日両親や家族と会うことが出来ません。離れて生活をしているからこそ、私からの連絡が怪我や体調不良の連絡だったら家族に余計な心配をかけてしまう。私はそう思い込んでいました。そんな私に両親は「心配なんていくらかけたって良い。なにもわからないのが1番心配なんだ」と口を揃えて言いました。

心配をかけたくないと思ってしていた私の行動がかえって、心配をかけてしまっていたことを知りました。常に完璧でなくてもいい、弱いところを見せてもいい、そんなふうに思わせてくれました。その時から私は変わろうと思いました。

怪我をしてしまったことはもう変わりようがない事実で、向き合っていかなければならない現実であることを自分自身に言い聞かせ、その中でも私ができることを探しました。犬の散歩で歩くりハビリをする。自分でできることを増やしていく。パワーをつけるため毎日きちんとご飯を食べて落ちてしまった体重を戻す。ずれてしまった背骨を元の位置に戻すためのストレッチを毎日するなど、自分でできることは何でもしました。一刻でも早くまたみんなとグラウンドに立ちプレーすることができるように両親や家族にもたくさん支えてもらいました。

走れるようになるのは3ヶ月後だと言われていた私が先日行われたサニックスワールドドラグビーユース本戦にてユニフォームを着て世界を相手に戦えたこと、応援に来てくれていた家族に前よりも少しだけ強くなった自分を見せられたこと、決して自分だけの力では見ることが出来なかった景色を見ることが出来て、とてもいい経験になったことを実感しています。

たとえ人生の途上で思いがけない困難や不運に遭遇した場合でも、決して自暴自棄におちいることなく、それを自分自身の運命を建て替えるいい機会であると感謝の心で受け止めることが大切です。この先もきっと超えるべき高い壁が立ちはだかってくるとは思いますが、そのたびに、私はこれもきっと自分を成長させてくれるものだと信じて真正面から壁に立ち向かっていきたいと思っています。ときには周りの人の力も借りつつ確実に成長していきたいです。

三年間をふりかえって

6年生 西谷 快

私が麗澤高校に3年間通って学んだことは「自愛」である。私は中学の頃から勉強ができなかった。加えて、中学時代はゴルフ部に入っていたが、すぐに幽霊部員になってしまった。部活を変えたら何か変わるかなと思い、高校では中学時の担任が顧問をしていた弓道部に入部した。始めた時は何をやってもうまくいかず、この部活もすぐに辞めてしまうのかなと思った。ただ家にもってゲームをしている自分が正直好きではなかったが、勉強や部活のやる気も起きず、ただ逃げてばかりいた。しかしこのままではだめだと思い、何か頑張ろうと決めた。そこで親の勧めもあり、まずは部活動を真面目に取り組もうと思った。

部活動をしていく中で、2年生になると副主将に推薦され、部の幹部として活動した。この立場は部の方針やルールなどを決めることができるため、最初は色々なことを変えていこう考えていた。しかし幹部になったからこそ気づかされることがあった。それは物事を変える時には様々なプロセスを踏まなければいけないということだ。小学生の頃につくる仲良しグループなどは、自分の主観のみでルールを決めることができたが、高校の部活になると話は違ってくる。物事を変える時はまず部活の責任者である顧問の許可を取る。そして部員のどの層が得をしてどの層が損をするのかを吟味しなければならないのだ。慣れない自分にとってはとても難しいことだったが、社会に出て必要なスキルだとわかっていたためマスターしようと思った。しかしここでもやりたいことが上手くできず、プロセスをわかっているのにできない自分が情けなかった。しかしここまでの部活を通して、負けや逃げなどの悔しさを学ぶことができたため、一生懸命に頑張ることができるようになろうと思った。マスターしてからは無意識にこのプロセスを通るようになり、

部の雰囲気も良くなった。そしてできた自分に自信を持つようになった。

部の雰囲気も良くなると、自然に結果も出てきた。男女ともに地区、県などの数々の大会で団体戦だけでなく個人戦での入賞を果たすことができた。しかし全国大会まであと一步のところまで負けてしまった。それから月日がたち、もう一度県外大会の出場権をかけた大会の前で、自分はコロナになってしまった。体力も落ち、正直勝つのは無理かなと思っていたが、諦めたら中学時代と変わらないと思えず努力した。その結果県外大会の出場権を獲得することができた。今までの努力が報われ、自分の自信につながった。そして県外大会になると5人制でベスト16、3人制でベスト24という成果を残せた。何より麗澤高校弓道部の新しい1ページを作ることができて良かったなと思った。

大会は他にも地区のリーグ戦があり、その試合でも順調に勝ち進め、個人合計の中で2位になっていた。しかし思いがけないことが起きた。最後の1試合となった時、本来の調子が出ず、麗澤の代表選手を他の選手と交代するかという話まで出ていた。自分は個人の賞のことを考えて、この後の試合に出ないという選択もできた。だがここで逃げたら今までの自分と変わらないと思え、最後まで試合に出るという選択をした。その結果、個人順位は6位まで下がってしまったが、最後まで逃げずに戦い抜いたということは今でも自分の自信につながり、部活の経験を通じて自分を好きになることができたと思う。

何もしないで高校生活を終わるつもりだった自分を救ってくれた親や、多くの事を学ばせてくれた顧問にはとても感謝している。高校生活3年間を通じて得ることができた自信や、それによって生まれた「自愛」心を大学に入っても大切にし、お世話になった人にいつか恩返しをしたい。

三年間をふりかえって

6年生 山口 春香

三年間の高校生活を振り返ってみて、麗澤で過ごした時間は長いようで短かったが、私を大きく成長させてくれた貴重な時間だったと感じる。数多い学びの中から、特に印象に残っている学びを三つ紹介する。

一つ目は、自分の周りにいる人への思いやりだ。入学したばかりの頃は、毎日が新しいことの連続で、そこからくる疲れや辛さを家族にぶつけてしまっていた。しかし、道徳の格言を発表するための原稿を考えていた時に、これまでの家族に対する自分の態度を見直し客観視することで、家族との接し方を改善するようになった。

二つ目は、置かれている環境への感謝だ。特にこれは高校2年生の時に参加したタイスタディツアーというボランティア活動に参加した時に強く感じたことだ。タイスタディツアーではタイにある衛生状態の低い村を訪れ、現地の方と交流する機会があった。そこで私が目にしたのは、ゴミ処理場の中の一角にある小さな家(学校)だった。置かれた環境にとらわれず、子供たちが勉強している話を伺い、私は彼らよりも向上心が欠けていると痛感した。それと同時に、自分の置かれている環境に感謝しながら、勉学に励むようにしようと思った。

三つ目は、自分を探究することの楽しさだ。三年間で、部活や課外活動などを通して他者と関わることが格段に多くなった。その中で自分はどう見られているのかと周りの評価を気にすることもあったが、自己を確立し、見失わないようにするのも大切なことだと思う。そうすることで自分は何が嫌いで何が好きなのかなど色々な面が見えてくるからだ。これは受験をする上でも欠かせないことであり、自分が到達したい目標とそれに向かう心を大事に、将来の方向性を決めていきたい。

これら以外にも、多くの学びを麗澤で経験することができたので、支えてくれた方々にとっても感謝している。